

## ぬくもりの7年間

小学4年 藤原 優芽

私には、昔から通っている、学校の教室ぐらいの大きさの図書室がある。そこで、山下さんという司書さんに、2才の時に会った。

2才の私は、父の大きな背中にかくれて、山下さんをチラリ、チラリとうかがう事しか出来なかった。とてもはずかしかったのだ。

山下さんは、太陽のように明るい性格で、とても優しくかった。3才の私が、いつも持ち歩いていた、ディズニープリンセスのお人形の話を書いてくれたり、本がどこにあるのかという質問にも答えてくれた。今まで、はずかしかったけれど、自分から話しかければ、相手にも話しかけてもらえるんだと、その時の私は、気がついた。新しい発見だった。

また、私が5才の時には、本をいただいた事があった。「カバゴンの紙工作」という本だ。その本を今でも大切に持っている。それは、山下さんにいただいたき重な物だからだ。

いつしか私は、図書室に行く時、本をかりる事より、山下さんがいるのか、いないのかという方が気になるようになっていた。

3月31日、その日は山下さんが退しょくされた日だ。当日私は、自分のお小づかいで買ったお花と手紙を図書室に持って行った。今まで言えなかった感謝の気持ちを、どうしても伝えたかったのだ。私は、山下さんがいなくなると思うと、花火が消える時のようなさびしさを感じた。

私は、山下さんと別れるまで、山下さんが私にとってどんなそんざいなのか、気づく事が出来なかった。けれど、今になってみると、山下さんの事がとても大切な事に気がついた。山下さんがいない図書室は、色あせて見える。

山下さんとの出会いは、私にとって宝物になった。山下さんの笑顔、ぬくもりの言葉を決して忘れない。これからも小さな出会いを大切に、心の花びらを開いていきたい。